



最近ロシアへ行く機会があり、ロシア人への見方が変わった。いや、初めて知ることばかり。第2

次世界大戦中、レニングラード(現サンクトペテルブルク)はドイツ軍から包囲された。市民は最悪を

予期してか、アニーチコフ橋の4カ所にある大作の彫刻を土の中に埋めて隠した。建造40年のイサク大聖堂も色の塗り替えや木枠で守った。戦争の爪痕は残るが、橋の彫刻群や大聖堂は現在も堂々と雄姿を成している。

一方、当時900日間の敵軍包囲で60万人の餓死者が、犬猫鳥はもちろん人肉も：果ては漆喰の壁まで口にしたという。食料となつた動物に贖罪の念か？現在の口

シア国民は犬猫に実に温かい。野生のスズメさえも、餌を持つ手のひらに乗ってくる(日本の方がペットたちにとって受難の国かもしれない)。

笑顔の少ない真面目な人々の気配は、暗い過去を連想させる。先の大戦で、政府は国民2千万人の犠牲を発表。だが1953年まで



辻畑 隆子

の支配者はグルジア人のスターリンやベリヤで、国民1千万人を処刑したり収容所へ送ったりしたともいわれる。つまり当時のロシア国民も被害者といえよう。

つい先日、「杉原千畝」の映画試写会に足を運んだ。彼は謀報の天才といわれたが、実は「誰よりもロシアに精通し愛していた日本人」だった。そして混沌とした情勢の今こそ、必要な国際人だと思つた。

(彫刻家・日出町)